

春の雁

吉川英治

青空文庫

はる
かり
春の雁

からつとよく晴れた昼間ほど、手持ち不沙汰にひっそりしている色街であつた。この深川では、夜などは見たこともないが、かえつて昼間はどうかすると、御旅の裏の草ツ原で、子を連れて狐が陽なたに遊んでいたりする事があるという。

——通船楼の若いおかみさんは、

「何だえ、包み始めてさ。……負けずに持つて帰るつもりかえ」

歯ぎれのいい女だけに、笑いながら云つても、人を蔑むように美しいのである。

清吉は、頭を搔いて、

「だつて、御寮人様、何ぼなんでも、この唐棧を、十七両だなんて」

「高価すぎるかえ」

「ご冗戯でしょう。新渡じゃあござんせんぜ。これくらいな古渡りは、長崎だつて滅多にもうある品じゃないんで」

内緒部屋の障子の棧には、絶えず波の影が揺らいでいた。すぐ裏手が、晩には猪牙の客

を迎える狭い河だった。

「どうするのさ」

通船楼の若いおかみさんは、清吉には苦手なお客様とみえる。せめて二十両でといえ、良人に着せるのだから、自分の一存ではそう高く買えないと云う。

「じゃあ、とにかく、置いて参りますから、旦那様にもお目にかけて上でひとつ……」

そこらへ並び散らしてある他の鼈甲物だの、縞だの、珊瑚だの、香料だの、青磁だの、支那人画の小点などを、片手に提げられるくらいな包みに小ぢんまりと纏めてしまうと、

「これでいいだろう」

金を出して、通船楼のおかみさんは、唐棧の一卷を、自分の後ろへころがした。

数えてみると、二十両あるので、清吉はかえって眼をみはってしまった。まだ二十歳を幾つも出ていまいと思われなのに、青い眉と黒豆のような歯並びをしているおかみさんは、

「ホホホホ。擲揄って上げたんだよ」

と、独りでおかしがった。

「へえ、ひどい事を！」

「あたりまえさ。良人うちのひとにわたしが見立てて着せようというのに、穢きたない値切り方をしたの、買い惜しみをしたのと聞いたら、着るにも気色きしよくが悪いと云って、良人だつて着やしないし、わたしの意気だつて届かないじゃないか」

「これはどうも、手放てはなしなところを」

「お惚のろけ気賃ちんは、前払いで云っている筈なんだよ」

三両の聞き賃かと思えば、ごもつともでいくらでも神妙に聞ける。勿論、清吉だつてまだ若いのだし、木の股またから生れたのでもないから、こんな女の素惚すのろけ気は決していい気持ちではないが。

それに清吉は、三年のうち二年を旅暮しで送っている身だつた。家は長崎で、反物たんものや装身具や支那画などの長崎骨董ながさきこつとつを持って、関西から江戸の花客とくいを廻り、あらかた金にすると、春はるの雁かりのように、遙々な故国ここくへ帰つてゆくのである。

ここの世界

清吉の花客とくいさき先は、上方でも江戸でもたいがい花柳界だつた。金持らしい金持となると、

近づき難いし、骨を折って出入りしても、買物となると、横柄おうへいぶっているわりに、貧乏人より金には細かくて、彼に云わせれば、

(みみツちい、見かけ倒しなボロ客だ)

そうである。

第一、鑑賞の眼がない、下駄まきえに蒔絵まきえをしたり、裾模様すそもように珊瑚さんごを入れたりして、豪華ごうしやぶつているのが多いのだ。唐棧とうざんの新渡も古渡こわたりもわからないでは、一反の縞かみに、二十金も出すような物好きにはなれない。そういう物好きの多いのは、やはり天下の狭斜きやうしやの街のうちでも、この深川に越した所はないように思われる。

そんなわけで清吉は、ずいぶん諸国の花明柳暗かめいりゆうあんの里を見て来ているが、およそこの深川ほど、意気だとか、きやんだとか、不可思議ふかしぎな女だましいと、あそびの世界の燈火ともしびとを、まるで名匠の芸術的事業でもあるように、客も妓おんなも、茶屋や船頭に至るまでが、競い合つて研みがいでいるなどという所は、およそ他国の遊び場所では見られないものだった。

——だから、ここではいい商あきないも出来たが、来始めの二、三年は、この土地の人間の気質きだてというものが分らなくて、清吉は呆あつ気けに取られてばかりいた。——分らないといえ、馴染なじみになつても、いまだに分らない問題に度々ぶつかる。

つい昨日きのうも。

櫓やぐら下したの大隅屋おおすみやへ商あいに行つて、茶ばなしに聞いていた話なのであるが――

其家そのこへよく来るお客で、綽名あだなを「黒くろさん」とも「能のうの面めん」ともいわれているお客がある。金切れもわるいし、御面相ごめんそうは綽名あだなのとおりだしするのだ。

(また、能の面の口だとさ)

と聞くと、何家どこの妓こも逃げを張つて、花代はなに依らず、座敷へ出てがない。

すると、お鷹たかという妓こが、

(わちきが、いいお客にしてみせよう)

と云つて好このんで出たが、同時に、べつな家のお蝶ちようという妓こも、

(そんなに持もてないお客なら、わたしが持てるお客にしてみせる)

と、自分から進んで座敷へ買つて出た。

四、五たび両妓ふたりがぶつかるうちに、当然、黒さんを挟はさんで張りッこになつた。お鷹は、

お蝶いに情夫いろがあるのを知つていたので、

(おまえの心意気か知らないが、そんなおせつ介かいに出なさんして、忠さんによいのかえ)

痛いところを、黒さんの前で素ツすぱ抜いた。

するとすぐお蝶は、恋人を呼びにやって、黒さんの眼の前で、無理に切れてしまったというのである。

——清吉には、どう考えても、そんな妓の心理がわからないのであった。それをまた、噂ばなしに、

(あの妓は、うれしい意気だよ)

などと称えてこの土地の女や男達の気持もなおさら、解せなかった。

もつと、彼が首を傾げた話では。

木綿のお力という妓がある。そのお力が、八幡前の小鳥屋の前まで来ると、人だかりがしていた。覗いてみると、尾花家の稚妓が小鳥屋の亭主に何かひどく呶鳴られていた。

(どうしたのさ)

ベソを搔いている稚妓に聞くと、稚妓をさし措いて小鳥屋の亭主が、店頭みせさきの立派やかな鳥籠とりかごを示し、これは今、蒔絵まきえの鳥籠を注文してあるが、それが出来てくれば、さるお大名へ納める事になっている朝鮮渡りの鶉ひよどりで、一番ひとつがいで三十両もする名鳥なのに、この稚妓が今、菓子など喰わせたから怒ったのだと口から唾つばをとばして云った。

するとお力は、

(おや、そうかえ。稚妓こどもだから、自分にひきくらべて、小鳥もお菓子を喰べたいだろうと思つてやったのだろうよ。わたしも、自分の勤めの身にひきくらべると、こうしてやりたくなつてしまつたよ)

あれ——という間に、籠かごの口を開けて鶉ひよどりを青空へ逃がしてしまつた。

(何もさわ噪ぐこたあないじやないか。三十両払つてやりさえすればいいんだろう)

首も廻らない借金のある上に、お力はまた、借金を増して、それを払つたという話なのである。

——中国筋すじ、大坂、島原しまばらと、諸国の遊び場所を通つて来たが、清吉はこんな馬鹿な女の多い土地はまだ他ほかでは知らなかつた。彼が今、一ひと商あきないした通船楼つうせんろうの若いおかみさんなどは、前のお蝶やお力などからみれば、まだまだ、くせの少ない方らしく思われた。

おとこあわせ
男 拾

「おや、おかみさん、好すいたらしい物をお買いなすつたね。これは古渡りこわたりじゃござんせんか」

清吉が立ちかけると、こう云つて、その内緒ないしよを覗のぞき、今おかみさんの求めた反物を沁々しみじみ見ている妓おんながあつた。

辰巳たつみごのみを典型的に身に持つてゐる妓こだつた。すこし窠やっれの見えるのもかえつて男には魅惑がある。二十三、四というところであろう。痩やせがたで、抜けるほど白い襟えり足あしが、寒紅梅かんこうばいにつもつた雪を連想させる。

「——あの人が無事でいたら、わたしもどんな工面くめんしても、こんなのを一反仕立いったんてて、今年の袷あわせに、着せてやりたいが……」

軽い嘆息ためいきして呶つぶやくと、通船楼の若いおかみさんは、

「何さ、秀八さんともあろう妓こが、そんなさもしい愚痴ぐちを云つて」

「ほんとに、わたしも少し臺とうが立つて来たらしい」

「お座敷かえ」

「え、めずらしく。……この頃あ昼間のお客でもなければ、招よばれもしなくなつたとみえてね」

「また、自暴やけにお飲みでないよ」

秀八という名を、清吉はそこで記憶した。やがて、おかみさんに励まされたり、軽口かるくち

を交わしたりして出て行つたうしろ姿を、清吉は、唾つばをのんでいるように、黙つて見ていた。

「いい芸者衆げいしやしゆうですね。あれで、売れないんですか」

その後で、こう話を出すと、

「どうして、この辰巳たつみでも、あんなに売れた妓こはなかった程だけれど、ちよつと、おかしな事が、ぱつと聞えたものだからさ」

「へエ、どうした理わけなんで？」

「何がさ」

「そんなに流行はやつていた妓こなのに、急に客が落ちたというのは」

「よけいな詮索せんさくをおしでないよ。おまえさんは、長崎骨董ながさきこつとうでも弄ひねつていればいいのだろ」

相手にもしてくれないのである。若いおかみさんは、さつさと立つて裏の川を覗きながら、今度はそこで晩の支度したくをしている抱え船頭と、明るい声で何か冗戯じょうだんを云つていた。

黒い嬌齒くろききょうし

品物はあらかた捌けた。

いつもならば、路銀だけを懐中に残し、後の金は悉皆、長崎表へ為替に組んで、身軽になつて江戸を立つ頃であつたが、清吉は、五月になつても、まだ深川に日を暮していた。

諸国の女の世界ばかりを花客先に廻つているので、よく儲けもするが、

(今に見な、木乃伊取りが木乃伊になつて、何か女で躓くから)

と、仲間の老人株からよく云われていたが、清吉は肚の中で、

(ふん、そんな甘いんじやねえ)

と、笑う者をかえつて嗤つていた。

だが——今度だけは、少しその気持のぐらつきを、自分でも認めないわけにはゆかなかつた。

ぷーんと藍の香のたかい袷の仕つけ糸を抜いたばかりなのを着込んで、今日も、灯ともし頃から、わざと人目離れた場末の新石場の金子屋へ出かけてゆくと、

「おや、清どん」

八幡横町はちまんよこちようで、ぼったり、通船楼つうせんろうの若いおかみさんに出会ってしまった。

「やあ、どちらへ」

清吉が、てれて云うと、

「どちらとは、こちらから聞くとところだよ。おまえさん、先月の初旬はじめには、もう長崎へ帰ると云っていたのに、今頃まで、まだ深川にいたのかえ」

「ええ……実は少し、掛金かけの寄らない先様さきさまがあるもんですから」

「嘘をお云い。何でも近頃は、せつせと金子屋へ通つて、秀八と会っているということじゃないか」

「誰がそんな事を云いましたか」

「云わなくなつて、あたしにはちやんと判っている。秀八が挿さしている翡翠珠ひすいだまは、おまえがいつか、わたしの釵かんざしか良人の根付ねつけにどうですと云つてすすめた珠じゃないか。どう？

恐れ入つたらう」

「……これは手酷てきびしい」

「会いたいなら、わたしの家うちだつてお茶屋だし、わたしが会わして上げるものを、隠れ遊びひんぎよくないね」

「相済みません。……どうもつい、お花客先のお宅じやあ」

「肩の凝りがほぐれないかえ。その解れないところにうま味があるんだけれど」

「そのうちに伺います」

「もう手遅れだあね。……出来ちまったものは仕方がないから、たった一言云っておくが、いつかもちよつと云つたように、あの妓の体には今、うるさい噂が立っているところだからね。おまえさんは旅の者で何も知るまいが、怪我をしないようにおしよ」

黒豆を並べたようなこの若いおかみさんの嬌齒が、清吉にはこの時も、何か他国者の自分を嘲っているように見えてならなかつた。宵詣りにでも来たのであろう。片笑鬨でそう云うとすぐおかみさんの姿は、鳥居内の宵闇の人影に紛れてしまった。

冷たい指

「約束のものを持つて来たが」

秀八の顔を見るとすぐ、清吉は、五十両の封金を三つ、ふたりの間へ置いた。そしてその手に杯を持った。

「じゃあ何も使い途を聞かずに……」

「元より、初めからの約束だ。おまえがそれを、情夫に貢ごうが、どんな借金に費おうが、何も訊こうとは云わないから、安心して取っておくがいい」

新石場は、深川での新開地だった。金子の二階からは、石川島の懲役場の灯がひろい闇の中にポチとみえる。秀八は、暗い海へ面を向けて、じつと何か思いに沈んでいた。

欣しそうな顔もしない。——一言、

(ありがとう)

とも云わないのである。

おまけに初めから、費い途は訊いてくれるなどいう約束だった。百五十両といえば算盤の弾き方を知っている清吉には莫大な金に違いなかった。彼の一生涯でも思い切った気前の一つとなるであろう程な額である。

「仕舞っておかないか。人が来るとよくないから」

杯を出した。

杯の糸底で秀八の冷たい指に、清吉の指が触れた。

「じゃあ、貰っておきます」

厚い帯のあいだへ、秀八は金を仕舞った。清吉は、自分が惜しい眼でもしていないかと惧れて、床の間の懐月堂の幅を見ていた。

意気といったようなもの——侠といったようなもの——この辰巳の女だけが持つさまざまな心伊達だの肌合いの中に溶け入って、清吉は一生涯に一度の思い出を創るつもりで、算盤を捨てているのだった。

——と云つても、ただの「遊び」でそれをしていくほど、彼はまだ枯淡な粹人では勿論なかつた。やはり秀八のずば抜けた緻容と、侠な辰巳肌のうちに、どことなく打ち潤っている窠れの美しさが、通船楼で見た時から受けたつよい魅力であつた。

あれから、わざとこの場末に避けて、七、八回会つていた。いつでも何か物案じな秀八の眸だつた。金の事なら——とあつさり引きうけたのが今夜の事となつたのである。

もつとも、その前後に秀八が杯の嘆息に、

(いッそ、他国へ行つてしまいたい)

と、二、三度つぶやいた。

清吉も心の裡で、

(この女となら——)

と、思わないでもない。長崎へ行かないかと云えば、一緒に逃げて来そうな気振もある。けれど、それを条件に、金を出すのは、辰巳遊びでいう——野暮というものになろうし、また、折角の金が死ぬと考えて黙つて——女の心のうごきを、彼は、見ようとしていた。

半刻ほど、静かに飲んでみると、秀八は急に落着かない顔して——

「やつぱり、わたしは今夜のうちに済まして来よう。清吉さん、このお金の費い途がいたら、わたしを連れて、すぐ江戸を立つてくれますか」

自分の胸だけで、もう決めていたような口吻だった。清吉はむしろ思う壺だった。百五十両が、この女の身代になるならばむしろ安値いものだという算盤が——無意識のうちに胸で働いていた。

「え。おれと？」

手を握つて、見つめると、

「九刻ころ、御旅の汐見松の下で落会つておくんなさいな。——私も、旅支度をして行きますから」

秀八はそう云うと、じつと清吉の手を握り返して、先に金子の座敷をもらつて歸つて行

つた。

みずちようし
水調子

九刻——といえども夜半、だいぶ間があるなあと、杯さかずきを見て清吉は独り思う。

支度と云つても、もう商いの荷はないし、旅馴れてもいるので、これに、脚絆きやはんと草鞋わらじさえつければ、だが——ふと不安になつて来たのは、

(ほんとに、来るのかしら?)

秀八の心の底だつた。

無心した金さえ費つかい途みちを、訊きいてくれるな、訊きくなら要いらないと云つた女。——考えれば危あやないものと、どうしても思おもわれてならない。

通船楼のおかみさんに啜わらわれたくない気がしきりにして来る。百五十両という額も、今さら、身に過ぎた大金に思おもえて惜あやしくもなつた。——けれど、ほんの通りがかりに、三十両もする小鳥屋ひよどりの鶯ひよどりをツイと籠かごから放はなして、生涯の借金に背負せおつても苦くるにしないでいる妓こもある深川かと思うと、こんな事では、辰巳たつみで遊あそび客の資格はないのだと、あの通船楼の

若いおかみさんの鉄漿おはぐろがまたどこかで嗤わらっているような気がするのだった。

なるべく、此家ここで時をつぶしていようと、清吉は銚子ちょうしを代えたが、手酌てしやくとなるとすぐ酔つてしまった。

ごろりと横になった。

葉桜がどこかで風になっている。ここの風にはじつとりと潮気しおけがあつた。若い手足をのびのび投げて吹かせていると、

だまされて いるのが遊び

なかなかに

騙だますそなたの 手のうまさ

水鶏くいなな啼く夜の

酒あじの味……

近所の窓から洩れる忍び駒が、熱い耳みみたぶ朶へ、冷んやりと流れこんでくる。

「ここらが辰巳の遊びの味というものかしらて？」

だが清吉は——例えば大きな博奕ばくちを賭はつているように結果が待たれた。黒と出るか白と出るか、その結果のわかるまが値打物ねうちものとは思うが、やはり秀八にこのまま打うつ捨ちやりを喰

えは嗤わらわれた揚句あげくまる損だし、約束した通りに行けば、金も生きるし、心意気も立つし、この先もう一苦勞してもいい相手だから、ずいぶん安値やすいものにつくが……などと彼の頭はやはり、算盤そろばんとは縁が断ち切れなかつた。

「まあ、お寝よつてゐるなら、搔卷かいまきでも持つて来てさし上げましたのに。……お風邪を引きやしませんか」

金子の女中が上がつて来て、彼の傍そばへ、用ありそうに坐つた。

「なあに、寝ちやあいないよ。いい氣持であの水調子みずちようしを聞き惚ほれていたのさ。……今何なんどき刻んどきだえ」

「もう八刻やつごろでしようか」

「よその爪弾つめびきなんぞ聞いていると、何だか、故郷心さとごころがついて、氣がめいっていけねえや。誰か、つき交ぜた顔で、三人ばかり招よばないか、飲み直して、からつと笑つて帰ろう」

「……でも、今、お迎えに見えていますよ」

「え。……誰が」

「通船楼のお使いが」

濡みつおくし

金子の勘定を払って清吉は使いに来た通船楼の男と、ぶらぶら河岸かしを歩いてきた。

「いったい、何の御用でしょう」

気にかかるので、しきりに訊きいてみたが、使いの男は何も知らない様子で、

「さ、何も伺うかがつておりませんが、ただ、おかみさんは先へ行って、土橋どばしの梅掌軒ばいしやうけんの床し

几ようぎで待っているから、あなたを呼んで来てくれと仰おんつしやっただけなんです。——何です

かいつぞやお求めになった、唐棧とうざんを包んで持つておいでになりましたから、あの反物たんもの

の事じゃございませんか」

「はてな。あれやあほんとの古渡こわたりで、新渡の贖物いかもものを売ったわけでもないが。……その

梅掌軒ばいしやうけんというなあ汁粉屋しるこやか何かですか」

「いいえ土橋どばしに出ている売卜者えきしやですよ」

「へえ、あんな俠きやんな氣質きだてのおかみさんでも、卜うらなどを観みてもらいに行きますかね」

使いの男は、土橋どばしのてまえまで来ると挨拶して、店へ帰かえってしまった。

竹の柱はしらに、八卦はつぱの乾坤けんこんを書いた布ぬいの囲かこい、暗い川風かわかぜにうごいていた。筮竹ぜいちくの前に、

易者の姿は見えなかった。——覗き込んで、ちよつと清吉がぼんやりしていると、

「こつちだよ、往來から見えるから、裏へ廻つておいで」

と、川の方に向つている幕の蔭で、通船楼のおかみさんの声がした。

巨きな柳樹の根を廻つて、裏の方へ行つてみると若いおかみさんは、その床几に腰かけて、川の櫓音でも聞いているようにじつとじていた。

使いの男が云つた通り、いつぞやの唐棧らしい丸い物を、風呂敷につつんで膝にのせていた。

「何ぞ、御用ですかえ」

その唐棧なら、突き戻されるような品でもないし、何か、苦情を云われたら、あべこべに云つてやる気で、清吉は小腰を屈めた。

「清さん……おまえ今夜、秀八に金をやつたらう」

「えつ……？」

「今、あの妓は、家へ来ているんだよ」

「へえ、おかみさんに、話しに行つたんですか」

「わたしじゃないのさ。……会つているのは、与力衆と、伝馬牢の同心だよ」

「牢役人に……。はてな？ ……それやあどういう理でございましょう」

「だからわたしが断っておいたじゃないか。——あの妓の情夫は、濡の伝兵衛という大泥棒なのだよ」

「げっ、そんな紐があつたんですか」

「白魚の黒いのがあつたつて、紐のない芸妓なんかいるわけではない。おまえも存外、色里を知らない人だねえ」

「そして、与力衆や伝馬役人と、どういふわけでお宅で会っているんですか」

「その濡の伝兵衛が、ついこの春先、お縄になつたのさ。ぱつと噂になつて、あの妓が売れなくなつたというのは、大泥棒の濡が紐だという事がお白洲で知れたからで、伝兵衛のお仕置は、獄門と極つたらしいが、どうしても、あの妓はそれを助けたいというので、お上の沙汰も金次第だから、その筋へそつと贈す賄賂の金を工面していらしい。……そこへおまえさんという鴨がかかつたから、早速、馴じみの与力衆から手を廻して、今、わたしの出て来る前に、離室でその取引さ」

「へエ、じゃああの金で、濡の伝兵衛とかいふ泥棒の男の生命が助かるんですか」

「まさか、お追放とはゆかないけれど、獄門のところを遠島ぐらいにはなるのは御

定法じようほうとされている。——つまらない眼あに遭ったのはおまえさんさ。もう金のほうは諦めあきらものだが、この上にまだ、曰いわくつきの妓おんなにかかっていると、どんな目にあうかも知れないから、親しい誼よしみに、一言ひとこと教しえておくよ。わたしの家うちでちらと見かけたのが、おまえさんの落目おちめの機きツかけになつたなんて、生涯せい云いわれるのは寝ねぎめがわるいからね」

「御親切ごしんせつに、有難ありがたうございます」

「こんな事になるなら、早く打明うちあけておけばよかつたけれど、まさか、おまえさんがそんな甘納豆あまなつとうみたいな人とも思おもわなかつたから……」

「あはははは、これあ御挨拶ごあいさつでございますね。清吉も、女にや甘あまいに違いちがいございませぬが、これでも色街いろまちの事には、年期としどを入れておりますから、溝更とどぶ、溝とどぶへ金かねを捨すてるようなへまはしてないつもりでございます」

「オヤ、そうなのかえ。わたしやあまた、半年も一年も、旅たびの空かぜで稼かせぎ溜ためたお金かねをと思おもつて、余計よけいな心配しんぱいをしたわけだが……」

「いいえ、この清吉しよきちだつて、初手しよてからそれくらいな事は、感かづいていないわけじやなかつたんで」

「へ。知しっていたのかえ」

「あの女の心意気に——ええ、百五十両くれてやりました」

「心意気に？」

「くすぐ擦つたそうに、通船楼のおかみさんは笑つた。闇の中でも鉄漿おはぐろは光つた。

「……成程なるほど、心意気かえ。……じゃあ他人から何もおせツかいは要いらない事。おまえさんも、二、三年辰巳へ商いに来たおかげで、たいそう深川の水に滲しみた通人つうじんにおなりだね。じゃあ来年またおいで」

心意気といえ、自分のヘマも隠されるし、先でも賞ほめてくれるかと思つていたが、案外、それが気に喰くわなかつたように、通船楼の若いおかみさんは、さつさと、清吉を置おき去ざりにして、暗い横丁へ急いでしまった。

裏うらで燈ともす灯ひ

「ごぼごぼと、咳せきの音がする。うどん屋へ外はずしていた易者の梅掌軒はなぢがもどつて来て、もう籐竹せいちくを鳴らしているのだ。

「唐棧とうげんを持つていたのに……その事は何も云わなかつたが」

若いおかみさんの曲がった横丁へ、清吉も曲がって行つた。

彼が尾ついて来るとは知らないもののように、通船楼の若いおかみさんは、薄暗い質屋しちやぐ庫くらにひつ付ついている葎障子しとみを開けて、そんな所を潜くぐりそうもない姿をついそこへかくした。

「……あ、質屋しちやへ？」

裕季節あわせどきに、買ったばかりの裕たんものの反物を。

それを買う時に云つた歯ぎれのいい若いおかみさんの言葉が、清吉の耳よみがえへ甦よみがえつてきて、何か皮肉なものを感じさせた。

「これで、あそこの楼うちの内緒ないしよも、知れたもんだ……」

八幡鐘はちまんがねが横丁を鳴つて通つた。

「ア、九刻ここのつ」

清吉は、急ぎ出した。通船楼のおかみさんは笑つたが、秀八の金の使つかい途みちを聞いてみると、清吉は、あの女が、確かに自分の心意気を受け取つているものという感じがした。かえつて、頼たのもしい女だという気持がつよくして来た。

魚の皮みたいな鈍にぶい海が見えた。漁師の家から赤い火がもれていた。御旅おたびの曲まがり松は、

磯原の真ん中であつた。

(……来ているかどうか?)

清吉は、心とは反対に、足を弛めて近づいて行つた。

秀八は来ていた。

座敷着を代えて、黒っぽい着物の裾を折り、髪も崩して、手拭の耳を啜っていた。

「……オツ」

つい、意外だつたような声を清吉は出してしまった。

「来ていたのか」

「だって、約束した筈じゃありませんか」

「いや……俺の方が、つい遅くなつたからさ」

「おまえさん、支度は」

「途中ですらあな。……何も大した身支度は要りやあしない。それより、おめえはもうそれでもいいのか」

「ちようど、深川の水に六年住んで、今夜が見納めかと思うと、何だか、名残惜しいけれど……」

「見納めだなんて、縁起えんぎでもない事を云わぬがいい。また、いつだって江戸へ来られるじやないか」

「でも、長崎くんだりまで行って、お前さんに捨てられたら、わたしやそれこそ迷ってしまおう」

「今は、何も云うめえ。どこか旅宿やどへでも落着いてから云うが、おれはおめえの心意気が嬉しいんだ。捨てるくらいなら初めから、費つかい途みちも聞かずにあんな金を出しはしない」

寝しずまった漁村を見ながら、波明りに添って二人は歩き出した。清吉はもう金の惜しみを考えなかった。——ただ侠きやんな肌あいの中に、濃こい人情と強い恋を持つ深川のおいが、艶なまめかしく、自分を絵の中につつまこんで、波の音までが享きやう楽らくに和しているかと思われた。

「……あの」

口籠くちごもりながら、秀八はふいに足を止めた。

「なんだい？」

「……ちよつと、もいちどわたし、家うちへ寄って、忘れ物を取って来たいんですけど。ここで待ってくれますか」

「近いのか」

「ええ、そんなにはない所だから、ちよつと走つて行けば」

「そうか、じゃあ行つて来な」

「すみませんが——」

何となく、それが、うつつな云い捨てようであつた。

待つていと云つたが、清吉は、秀八の後から尾けて行つた。潮くさい漁師町の露地へ、彼女は、小走りに入つて行つた。

トントントンと、そこの一軒を忍びやかに叩いて、

「おばさん、おばさん……。秀八ですよ、もいちど開けて下さいな」

老婆としよりの音が聞え、彼女は、あわてて中へかくれた。穢い漁師小屋だつた。魚油ぎよゆを燈すとも

とみえ、臭い灯ひのにおいがして、家の中に、黄色い明りがついた。

「坊やは。……おばさん……。坊やの顔を見せて！」

彼女の体も声も、生理的にわなないていた。——と見るうちに、その藁わらむしろの上に敷いてあるうす穢ぎたない蒲団ふとんの中へ、彼女はふるえつくように身を入れた。

そして、自分で白い胸をはだけると、寝ている幼児おさなごの唇くちへ、強しいるように、乳ぶさを

ふくませ、

「……坊や、坊や。……わたしだよ、わかるかえ。……もう当分はおわかれだから、もういちど帰つて来たんだよ。さ、たと吸つておくれ。たと吸つてね……」

一心に乳を吸う幼児の唇の音と——その顔の上へ顔を重ねて泣いている彼女の涙の音とが——戸の外まで聞えるように思われた。

「……?」

じつと、外に立ち竦んで、雨戸のふし穴からそれを覗いていた清吉は、深川の水の底を——辰巳女の肌あいの底を——今こそ眼にまざまざと見せつけられたように固くなつていた。

「ああ……おれにも」

ふと彼は、遠い長崎の家にある自分の妻と子を思い出した。

油のように海は眠っている。

櫓 下や八幡や、深川の灯の空は、今を潮時にぞめていた。

砂を蹴つてただ一人、逃げるように浜を素つ飛んで行ったその夜の男は、もう翌年から、この土地へ商いにも来なかつた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「オール読物 臨時増刊号」

1937（昭和12）年4月

※初出時の表題は「春燈辰巳読本」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の雁

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>